

中国の公立中学に在籍する日本人生徒の 二言語の発達と文化的アイデンティティ

付 傑

1. 研究背景と目的

近年の急速なグローバル化と人口移動に伴い、中国に長期滞在する日本人数は年々増加している。それにつれ、同伴する子どもの数も確実に伸びている。「海外在留邦人学齢期子女数調査」(平成 20 年)によると、海外に 3 ヶ月以上滞在する日本人子女数は上海が一番多く、総 3223 人、北京が 9 位で、総 1029 人、今後も増えていく傾向にある。そこで、中国に長期滞在する日本人生徒に関する研究に価値があると考え。特に、現地の公立学校に通う子どもにとって、学校の使用言語は中国語となり、日本語は少数派言語ということになる。彼らは日本人学校に通う子ども以上、対人関係が複雑になっている。このような現地の公立学校に通う生徒は異文化体験をしていくうちに、どのように自己形成をしているのかは重要な研究課題であると思われる。

しかし、中国の現地校に通う日本人児童生徒の、言語の発達と文化的アイデンティティに関する研究の蓄積は十分ではないといえる。彼らの言語教育や異文化理解教育の内容や方法を考えるのは今後中国における外国人児童生徒教育に有効であると考え。

そこで、本研究では、中国の公立学校に通う日本人生徒に着目し、彼らの二言語の発達と文化的アイデンティティはどのような状態になっているのか、そして、その間に関係があるのか、あるとすれば、どのように結びついているのかを明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

Lambert(1974)によれば、第二言語とその文化が第一言語の地位を脅かすような圧力を受けずに習得された場合は、加算的言語併用が生じる。その加算的言語併用は肯定的な自己概念に結びつくことになり、認知面や情緒面での肯定的な効果が期待される

という。(コリン・ベーカー 2002 より)

中島(1998)は 2 つの言葉をどういう環境で習得するかという問題は、アイデンティティの形成に深く関わっていると主張する。中島(1998)の中で、樋口(1994,1996)を紹介してある。それはカナダ生まれの日系子女 42 名に英語と日本語の読解力テストと面接によって、2 言語とアイデンティティとの関係を調査したものである。その結果、2 言語の到達度とアイデンティティとは関係が深く、両方のことばがよくできる「2 言語高度発達型」ほど、アイデンティティがしっかりしていて言葉だけを状況に合わせてスイッチできるという。

以上の研究から、2 言語の発達と文化的アイデンティティの間に関係があることが推察できる。

また、箕浦(2003)は学齢期にアメリカに渡り、現地校に通学していた日本人を対象に、対人関係の文化の体得過程について調査を行い、自文化から異文化に移動する子供の人格形成の過程を明らかにしている。文化的アイデンティティの形成は「渡航時年齢と滞在期間」、「性別・パーソナリティ」、「家庭環境」、「学校環境」、「同輩集団」といった様々な要因と関わりと指摘している。

箕浦(2003)は心理的な側面から文化的アイデンティティの形成過程の探求、及びその形成に関わる要因の解明、といった面でとても示唆が得られた。

二言語の発達と文化的アイデンティティとの関係はどのように結びついているのかを明らかにすることにより、子どもへの言語教育や異文化理解教育の内容や方法を考えるには有効なのではないだろうか。

3. 研究方法

本研究は修士論文の一部分としての面接調査を取り上げたものである。北京市内にある A 学校に在籍する日本人生徒 3 名(表 1)を対象に、一人当

たり1時間半ほどの半構造化面接調査を行った。面接は質問項目を記したインタビュー・ガイドを参照しながら、質問を行い、回答を得た。面接は日本語で行ったが、内容によっては、彼らから中国語に切り替えることがあった。質問項目は箕浦（2003）を参考に作成し、大きく①中国での生活、②学校と家庭での教科学習、③言語使用状況と二言語能力及び二言語学習、④文化的アイデンティティ、に分かれている。面接で得られたデータについては文字化したデータに密着してまとめ上げるのに適することと質的研究法の中で手続きが体系化されていることから

表1 調査協力者のプロフィール

生徒	性別	学年	渡中年齢	滞在期間	母語	国籍	親の母語	親の国籍
A*	女	中学校二年	4歳	9年	日本語	日本	母：日本語 父：中国語	母：日本 父：中国
B*	男	高校二年	11歳	5年	日本語	日本	母：中国語 父：日本語	母：中国 父：日本
C	男	高校二年	11歳	4年	日本語	日本	母：中国語 父：中国語	母：日本 父：日本

*Aは中国生まれ。生後すぐに日本にもどる。父親はAが2歳の時に亡くなる。

*Bは2回の渡中経験がある。今回の滞在は4年経っているが前回の3年を加えると、総滞在期間は8年となっている。

から心掛けており、ほとんど【中国に帰属感を持たない】。「中国にいながらも続けた日本語の使用と日本語の接触」、「日本人同士の交流」、「毎年の一ヶ月にわたる日本の小学校での勉強」、「休暇のたびの日本帰り及び日本側の親戚との付き合い」、「日本人の母親の補助」という五つの要因で日本語の保持ができています。9年以上中国で生活をしていながら、【中国に帰属感を持たない】のは仮住まいであるほか、「中国人の父親の死去及び中国側の親戚との交流なし」、「中国の学校におけるよくない思い出」、「中国の社会環境に対する不満」と関連している。結果として、【中国に帰属感を持たない】ことと【母語である日本語の保持】は、Aの【日本人としての文化的アイデンティティ】の保持に結びついている。それは「日本人学校へ通いたい思い」、「日本に帰りたい思い」、「日本人を庇う意識」の具体的な感情として現れている。

一方で、Aは「日本語より上手な中国語力」を身につけ、「教科学習についていくための日本語力の不足」が生じ、日本の小学校で勉強する際に、「中国で学んだことは日本でも役立つ」となった。【学習面で自分を発揮できる中国語力】を身につけたことはAの【中国に対する印象の改善】に良い影響を与えた。Aは「中国の学校教育への良い評価」を

らグラウンデッド・セオリー・アプローチを参考に、まずケースごとに分析を行い、それぞれの関連図に基づき、ストーリーラインを記述した。その後、データ間の類似性や相互関係から傾向を見出して、三人の結果を統合し、考察を行った。

4. 研究結果と分析

4.1 ケースAのストーリーライン—分析結果の概要

幼稚園時代から、「母親の仕事で渡中」したAは、「仮住まいの覚悟」を持って中国での生活を続けてきた。そこで、【母語である日本語の保持】を普段

し、それから、中国語が上手になったことにより、「中国人の友人作り」ができたことで、「中国人の情熱的な面への好感」を持つようになった。そのことはAの【バイリンガルとして活躍していきたいという願望】を抱くことに内面から原動力を与えた。

【母語である日本語の保持】ができたことにより、Aの【日本人としての文化的アイデンティティ】は保たれている。また一方で、【学習面で自分を発揮できる中国語力】を身につけたことで、Aは「長年に渡って身につけた中国語と中国文化を大切にしようという意欲」を持ち、それを医者になりたいという夢とうまく合わせ、将来日本に帰り、「日本の国際病院で働く医者になりたいという夢」を持つようになった。つまり、母語と第二言語の発達はAの【バイリンガルとして活躍していきたいという願望】に結びついたのである。また、このプロセスの中での「母親が果たした大きな役割」は極めて大きい。日本人の母親の存在は、Aに「安定感を与える」効果があり、Aの「母語及び日本人としての文化的アイデンティティの保持」に役立つ一方で、「中国の公立学校へ入学させたことと中国の大学への進学を提案したこと」はAに【学習面で自分を発揮できる中国語力】の習得のきっかけを与えた。

4.2 ケースBのストーリーライン—分析結果の概要

Bは11歳の時、「父親の仕事で再び渡中」した。その後、父親はシンガポールへ赴任することになった際、【両親が中国での教育を選択】た。その時から、Bは「母親と北京での二人暮らし」をはじめ、現在に至る。【両親が中国での教育を選択】したことはBの【中国の学校での成功】へとつながった。

文化間移動を繰り返したBの【母語である日本語の習得と保持】について、習得は「五年間に渡る日本の小学校及び塾での勉強（成績優秀）」と、「子供が早く日本語を習得し、日本の学校に慣れるための母親の努力」、及び「二年間に渡る日本人学校及び補習班への通い」、を通してできたものである。保持の手段としては、Aとほぼ同様である。Bが身につけた母語能力と日本で収めた優秀な成績は彼の【中国の学校での成功】に関連した。Bにとって、「日本で学んだことは中国でも役立つ」。また、「母語並みの中国語力」を身につけたことで、「中国の学校への溶け込み」がうまく進み、中国の学校でも「優秀な成績」を保つことができた。しかし、「日本語能力の低下」は避けられなかった。Bは「高校の学習負担により、日本語学習への無力さ」を訴えた。大学受験が終わったら、日本に帰って、「日本語や日本文化を再び学ぶつもり」だと語った。

母語である日本語の習得と保持、及び中国の学校での成功はBの中に生まれた【二つの文化的アイデンティティ】に関連している。Bには《日本人としての自分》と《中国人としての自分》がある。「自分が日本人だという意識」は「日本と日本人を底う意識」として現れ、「ルールを守り、礼儀正しい日本への誇り」は彼の中で大きいものである。そして、Bの中に存在する《中国人としての自分》とは、「中国の文化と習慣の吸収」、及び「比較的中國に向いている個性」を持っているということである。

また、Bは常に「積極的」な姿勢を示しており、「自己アピール型」で、「強いエリート意識」を持っている。このような【日本に向いていない個性】を持っているBは「日本国内での発展を目標としていない」。その一方で、Bは「中国の試験中心の教育への拒否」があり、「歴史問題による中国の学校でのいじめ」を受けたこともある。他にも、「中国の環境への不満」と「中国人の冗談好きな性格に悪印象」を持っているため、彼は中国の大学への進学も目標から外した。結局、Bは「英語学習への熱

意」と「アメリカへの強い留学願望」を動機にして、自ら【アメリカ志向】を選択したのである。

要するに、【母語である日本語の習得と保持】によって、Bは《日本人としての自分》を維持することができた。そして、高度な中国語力を身につけたことによる【中国の学校での成功】は彼の中に《中国人としての自分》を生み出した。彼は日本語も中国語もできて、その上に英語も習得できるという「三ヶ国語での活躍」を望み、【マルチリンガルとして活躍していきたいという願望】を持っている。

4.3 ケースCのストーリーライン—分析結果の概要

Cの成長はAとBと同様、【母親が果たした大きな役割】を除いては語ることができない。母親の努力は【母語である日本語の習得と保持】にも役立ち、【中国の学校での学習】にもよい影響を与えている。

自分の【母語である日本語の獲得と保持】について、Cは《日本語への自信》に満ちており、「十分に発達した日本語力という自己評価」をした。それは「日本の幼稚園と小学校及び塾での勉強」によるものである。中国に来てから、《中国での日本語保持の努力》は、AとBとほぼ同様である。【母語である日本語の獲得と保持】はCが《日本人としての自分》を保つのに重要である。Cの中に存在する《日本人としての自分》は、「日本国籍を有する日本人である」ことの強調、「野球や漫画が好きな日本の若者の特質」、「ルールを守る、礼儀の正しい日本が好きな気持ち」などに現れている。

一方、Cは日本で「塾の勉強についていけない」うえ、「勉強自体への嫌な感情」を持っている。それに、「日本の子どもに中国人だと馬鹿にされた経験」があるなど、Cは【勉強ができない私という日本での自己イメージ】を語っている。Cは自分が「日本国籍を有する日本人である」ことを強調しながら、「日本は母国ではない」、「日本語は母語であるが、母国語ではない」、「日本の高ストレス社会が嫌い」と主張し、《日本に帰属感を持たない》という複雑な感情を語っている。Cにとって、日本は自分の居場所ではない。Cには【不安定な日本人としての文化的アイデンティティ】が現れている。

また、日本で起きた学習の困難は【中国の学校での学習困難】にも影響を与えている。Cは中国に来て「ゼロから中国語を習い始めた」うえ、中国語が全くわからない状態で「サブマージョンの学習環境」に置かれていた。Cは1年半ぐらいで「生活言

語能力を身につけた」が、「学習に必要な中国語力は身につかない」状態が続いていた。Cにとって、中国語での教科学習では、「全ての教科が理解しにくい」ため、学校での成績は芳しくなかった。つまり、中国語の力が十分に発達していないことで、中国の学校でも、Cは自己達成感が感じられず、自分の居場所を見つけられずにいたのである。さらに、Cは「中国語ができないことで中国人生徒に苛められた経験」さえあり、その上、「漢字だらけの中国語が嫌い」だと語った。「歴史問題による学校でのいじめ」に加え、Cは「マナーをきちんと守らない中国社会への嫌な感情」を持っており、生活場面においてもマイナスな感情を抱えていることがわかる。そのことから、最終的に、彼が【中国に帰属感を持たない】という結果に結びついたのである。

このように、Cの中には【不安定な文化的アイデンティティ】が形成されているといえる。日本と中国の「両方に居場所は見つからない」彼は、「両親の母国は中国だが、自分に母国はない」と強調する。ただし、Cはその逆境の中で肯定的な自己意識と自信を回復するために、自己存在感と居場所を探そうと模索している。彼が持ついくつかの【価値観と世界観】の中で最も強く主張されたのは、「のし上がって成功することが大事」という考えである。それは、「自分の良さは積極的にアピール」、「他人の評価は関係ない」、「自分から動く」、「困難から逃げない」、「時間を無駄にしてはいけないという効率性の重視」という姿勢として現れている。その他、「交友範囲は広く、親友は一人二人に限る」、「人との真正面の摩擦を避ける姿勢」、「人の注目がほしい」という《対人関係》観と、居場所探しの過程における《両言語の発達の重要性》をCは主張する。彼は「中国語の力は中国での自己防衛及び居場所確保の必須要素」だと考え、「両言語を同程度に発達させたい願望」を持っている。

5. 総合的考察と今後の課題

以上3人の中2人は日本語と中国語の両方を身につけ、母国と中国のいずれにおいても、教科学習と学校への適応が順調に進んでいる。その背景には、言語習得と学業、言語習得と同輩集団、言語習得と

家庭環境、という3つの相互関係がプラスに作用したと考えられ、その結果、文化的アイデンティティの安定がもたらされ、明確な将来像を描くことに結び付いている。1人は母国での学習がうまく行かなかったうえ、中国語が十分に発達していないことで中国でも学習困難の状態が続いている。それに、同輩集団へうまく溶け込んでいない。母国と中国の両方において居場所が見つからず、両方の文化に対して否定的になっており、文化的アイデンティティの揺らぎが起きている。また、母親の教育へのかかわりの積極性は共通するものの、両親・本人にとっての「中国」「日本」の位置付けは他2ケースとは異なっている。この点が、文化的アイデンティティの形成に影響を与えている可能性がある。

本研究は、3人の日本人生徒を対象に面接調査を行い、2言語の発達と文化的アイデンティティの間に関係があることをある程度明らかにしたが、研究期間の制限で、対象者と面接内容が極めて限られており、理論が飽和状態に至っていない。そこで、現段階の分析に基づき、調査対象者を増やしていく必要がある。さらに、親が子どもの2言語の習得をどのように捉えているのか、子どもの文化的アイデンティティの形成にどのように関与しているのか、といった親の視点からの考察も必要であり、保護者を対象とした面接調査も今後の課題となる。

参考文献

- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ実践』 弘文堂
- コリン・ペーカー (2002) 岡 秀夫 訳・編 『バイリンガル教育と第二言語習得』 大修館書店
- 戈木クレイグ・ヒル滋子 (2008) 『実践 グラウンデッド・セオリー・アプローチ 現象をとらえる』 新曜社
- S・B・メリアム (2006) 堀 薫夫・久保真人・成島美弥 訳 『質的調査法入門——教育における調査法とケース・スタディ』 ミネルブア書房
- 中島和子 (1998) 『バイリンガル教育の方法——地球時代の日本人育成を目指して』 株式会社アルク
- 箕浦康子 (2003) 『子供の異文化体験 増補改訂版——人格形成過程の心理人類学的研究』 新思泉社
- 村中雅子 (2010) 「日本人母親は国際児への日本語継承をどのように意味づけているか——フランス在住の日仏国際家庭の場合——」 『異文化間教育 31』 p61-75

ふ じえ／東京学芸大学大学院 日本語教育コース
sunnyfujie@yahoo.co.jp